

知恩院周誉珠琳と浄厳坊宗真

——珠琳の一書状をめぐって——

伊 藤 唯 真

一

近江の金勝阿弥陀寺（滋賀県栗太郡栗東町東坂）に、知恩院周誉珠琳の書状（縦三十六・五糎、横六十二・五糎）が一通所蔵されている。現在軸装されているが、次のようなものである。

就 御崩御之儀、兼亦御位牌之事承候、則示遣之候、御弔肝要候、去十一日後之御事御座候」十三日ニ伏見之般舟三昧院江御諷經ニ参申候、自当院之御經、進上之御經」同持参申候、御經諷經共殊最前之」様候間、二宮様御対面候て、一段御感之様候間、翌日にも又禁裏様江御經御弔之様奏聞申候、尤有御上洛雖可被申御弔候、就御眼老不合期之間無其儀候、被遣御僧候、自当院心得而可申達之間、懇申上候、長橋局より」念比心得候て可申旨候条々懇」届申候、旁期後音候、将亦」当今御位之御祝言、先々悉御成候、御朝家之儀、不相替目出度候」恐惶謹言」

霜月廿三日

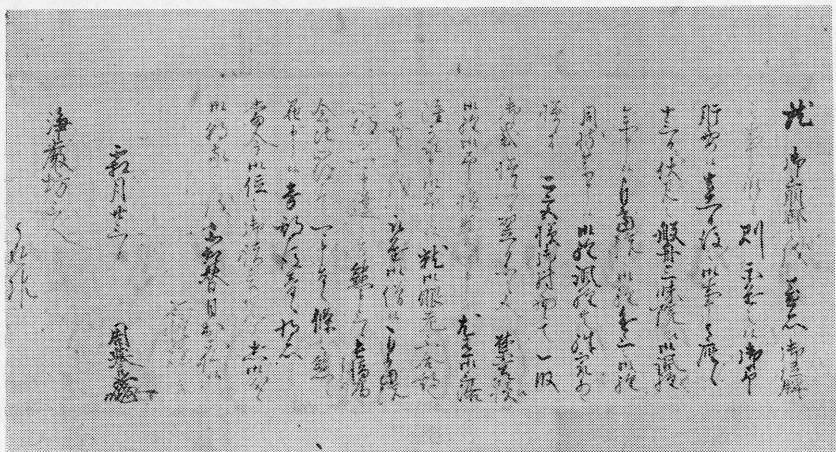
周誉（花押）

浄嚴坊上人

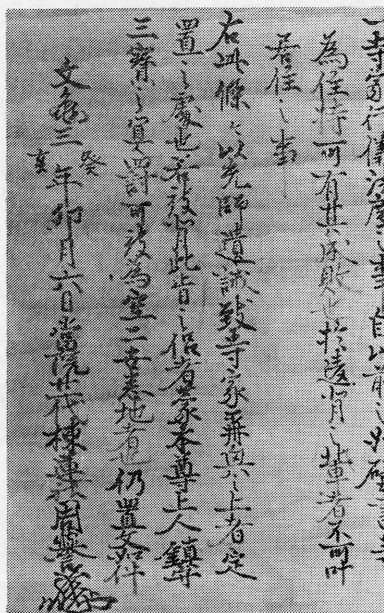
御返報

本状は全文珠琳の真蹟である。そのことは新知恩院所蔵の珠琳関係のもの、たとえば文龜三年（一五〇三）の「周誉置文」などと対比しても明白である。書状に常の如く、本状には年紀が示されていないが、文面の崩御とは後土御門天皇のことであるから、明応九年（一五〇〇）、珠琳六十二歳のときのものである。

宛先の浄嚴坊上人とは嚴誉宗真のことである。浄嚴坊という名称は、もともと浄土宗史上に著名なかの隆堯法印が金勝寺（天台宗）境域の金勝山の峰の谷間に結んだ草庵の名に由来するが、こ



浄嚴坊宗真宛珠琳書状 阿弥陀寺蔵



珠琳置文 新知恩院蔵

の淨嚴坊隆堯は金勝山の東坂にも別に堂庵を結び、のち宗真がこれを拡大して阿弥陀寺と号してからも淨嚴坊を通名としていたものである。阿弥陀寺は淨嚴坊隆堯法印（宝徳元年没）を開山とし、その嫡弟堯譽隆阿（文明十三年没）を二代とし、金勝寺の淨嚴坊で隆阿に弟子入った宗真を三代としているが、宗真を阿弥陀寺の実質的開山といつてよい。宗真は永正十五年（一五一八）八十歳で没しているから、珠琳から返報を受けた明応九年は六十二歳ということになり、後述のように知恩院の「中興之開山」と目された珠琳と、近江における浄土宗教団興隆の貢献者たる宗真とは奇しくも同年者であつた。

珠琳のこの書状には「淨嚴坊上人」と書かれているが、宗真は前年の明応八年（一四九九）四月に上人号の勅許を得ていた。『御湯殿上日記』同年四月二十八日条に、御礼のため上京、珠琳に付添われて参内し、阿弥陀寺靈宝の弘法大師筆阿弥陀抄物を進上したことが次のように見えている。

（金）^正ふみのしやうこんはうこそ上人の事申入て、御れいもうきによりて侍しやのそうして申されしか、のほりて御れい申さるゝ、れいほうのこほうたいしの御ひつのあみたせうもつ、ほんにすへてしん上申さるる、ちをんるんそひてまいられて御たいめんあり、

知恩院珠琳の執り成しがあつて、淨嚴坊宗真に上人号が宣下されたのである。宗真は、翌年の後土御門天皇の弔いには上京できなかったが、このときは上京して参内し宝物を献上したのである。この後眼疾が進んだのであろうか。

ともあれ、本書状は知恩院二十一代^⑩珠琳が明応九年十一月二十三日に近江国栗太郡の阿弥陀寺住持嚴譽宗真に宛た返報である。この返報に対応する淨嚴坊宗真からの書状や申越しの旨趣を書き留めた記録の類は知恩院に今伝わっていないが、使僧をもって申進めたであろう内容はこの珠琳返書から推量することができる。

冒頭に書かれている「御崩御」が後土御門天皇のそれであることは既に述べたが、後土御門天皇と准三宮庭田朝子との間に生誕されたのが勝仁親王であり、その御弟の尊敦親王であつた。珠琳の書状にある「当今」とは即位された

勝仁親王、即ち後柏原天皇である。その踐祚は明応九年十月二十五日で、珠琳書状が出された約一ヶ月前であった。因みに、後土御門天皇の崩御は同年九月二十八日、御寿五十九、また後柏原天皇はこのとき三十七歳であられた。また書状に「二宮様」とあるのは「今上御同腹御弟^⑧」の尊敦親王のことであるが、この書状が認められた当時は尊伝と得度改名されていた。尊伝親王は青蓮院にあって准后尊応の法嗣となられた方でもある。

さて、この珠琳書状の内容であるが、概ね次のようなことになる。後土御門天皇の御崩御のこと、かねて承わっていた御位牌のことを示し違わすが、御弔いが肝要である。十一日に葬礼があり、十三日に般舟三昧院へ諷經に参った。知恩院よりの御經と貴寺進上の御經とを持参した。經供養、諷經は他寺に先んじたよう、尊伝親王は御対面下さり、一段と御感にあずかったようで、翌日にも禁裏へ御經御弔いのことを奏上した。江州から上落して御弔いされるべきであるが、御目が不自由なため代僧を遣わされたのだから、当方ではそのことを心得て、その旨をよく申しておいた。長橋局からはそれに応えた御言葉が伝えられてきたが、後日の音沙汰を待っている。また勝仁親王が踐祚され、御祝も済んで、御朝家はめでたいことである。以上が前掲書状の要旨である。

このように右の書状は、直接的には後土御門天皇の弔いに知恩院と阿弥陀寺とが関与していたことを伝えているが、間接的には、知恩院と阿弥陀寺の相互関係はもとより、両寺の対皇室関係や教団上での地位などを示唆しているようである。そこでこの書状の背景を探るならば、その史料的价值は一段と明らかになるであろう。

二

先ず、後土御門天皇の葬儀と弔いのあった般舟三昧院について見ておこう。

天皇の崩御前後のことは『御湯殿上日記』『後法興院記』などに出てくるが、また東坊城和長、五条為学などの記録に拠って当該部分が編纂されている『統史愚抄』によってもその経過を窺うことができる。

天皇の御悩は数年来の脇下の腫物に由るが、明応九年の三月ごろから悪瘍となり、九月下旬に入って悪化、二十四日に脉が乱れ、二十五日夜に危急となり、二十六日ひる過ぎ御座を黒戸御所に移すに至り、二十七日から般舟三昧院住持が祇候し、十念を授け奉り、二十八日寅刻に「りんしゅうしやうねん」に崩御された。

しかし十月二日になっても正式な披露がなく、ようやく四日に御入棺の儀が行なわれ、五日から弔問が始まった。

崩御の披露が遅れたのは、讓位の儀がないままに崩御されたからで、先規のない珍事とされた、追号は後陽成と後土御門の二案があり、十月二十一日に後者と決った。

十月二十五日、土御門殿小御所で踐祚の儀が行なわれ、この日から二十七日まで宜陽殿での饗宴があった。珠琳の書状に「將亦当今御位之御祝言、先々悉御成候」とあるのはこのことを指している。

越えて十一月十一日、後土御門天皇の葬礼が行なわれた。崩御後実に四十三日目であり、このような葬礼の遅延も先例のないことで、不審に思われたのも当然であった。亡き先帝は戌刻に黒戸御所から出御されたが、御車は土御門里内北門東方の築垣を壊して遣出され、御遺体は泉涌寺で荼毘に付された。珠琳書状に「去十一日後之御事御座候」と書かれているのは、先帝の葬礼のことである。十二日に拾骨され、深草法花堂、雲龍院、般舟三昧院などに分祠された。また二十三日には誦經使が常住寺、仁和寺、東寺、安樂行院、淨金剛院、天龍寺、泉涌寺の七ヶ寺に派遣され、中陰の誦經が命ぜられた。

伏見の般舟三昧院では、葬礼のあった十一日から中陰の仏事が始められた。実際の中陰の各忌日はもっと早いわけであるが、披露がなく葬礼が遅延した間を除外して、公式には葬礼のあった日を起点として中陰仏事がなされたのである。二十八日には三七日聖忌、十二月六日に四七日聖忌、十一日には五七日聖忌、十七日に六七日聖忌、二十三日に七七日聖忌が般舟三昧院で勤められ、各々御経供養が修せられた。

珠琳が般舟三昧院へ知恩院と阿弥陀寺からの御経を持参し、誦經したのが十一月十三日であったから、葬礼の翌々

日に当り、きわめて早い時期での弔いであつたといえよう。知恩院や阿弥陀寺が後土御門天皇の弔いに参上せねばならない事情については後で言及するが、ここで般舟三昧院について少し述べておきたい。

般舟三昧院は後土御門天皇が応仁の乱後幕府に命じて造成せしめられた寺院である。土佐光信が描いた天皇の寿影と御製の和歌一篇が留め置かれ、般舟三昧院に由来する般舟三昧院の寺号が掲げられ、朝家の方々の追善仏事が修せられるのが常であつた。三条西公条の『般舟三昧院記』には

伏見般舟三昧院は後土御門院御草創なり、凡此伏見は福地富窟にて、橘俊綱久しく居をしめ、長者の号をのこせり、山形勢河の眺望天下無双の地たり、されば雪見御幸など轡をさかせる所なり、其後貌姑射の離宮別館代々に及べり、殊更正応の御追号たりしより数代大王の御所にて、今に伏見殿とて其御跡をのこし給へり(略)然則後土御門院継躰の君として位をつぎ給へり、幼年の御時此宮に養ひたまつらる、春の花、秋の月、おりくは此あたり微行経歴したまへるに、ひとへに此所に御心をとめ、つゐには洛陽の跡ををはむとおぼしめし、楽邦に御志をかけましくて、其ころ北嵯峨二尊教院に住せる善空上人諡号円慈和尚四衆兼才をたふとびおぼしめして、菩薩大戒をうけましくて、浄土安心などきこめして、ひとへに安養得生に皈し給へり(略)御齡四十八の年、鸞鏡にむかはせ給ひて御てづから龍顔を模写せられ、画所預光信に仰られて尊形をうつさしめ、御製の和歌一篇を題せられ、この院にのこされけり(中略)此御門は位にありながら、後世を御心にかけ、六十有余の宝算をたもち給へり、これにさきだちて仙宮を経営し、仏閣を建立の歡願にて、征夷大將軍にみことのりして、造立不日落成せり、則般舟三昧院の勅額をかけらる、それより以来遺勅ありて、代々御追善追福此所にて修せらる事恒例なり、毎時禁中に模せらるゝ故、法会は皆准御齋会なり(略)當時にをきては勅願随一の精舎とも申すべきにや。

と書かれている。^④因みに、当院は豊臣秀吉の伏見築城とともに、京都市北区今出川千本東入ル般舟院前町の現在地に移転した。

文明十一年（一四七九）八月四日に地引始めがあり、同十八年（一四八六）十月二十五日に上棟、同年十二月二十七日には先皇後花園天皇十七回聖忌の御経供養が落成後間もない当院で修されている。長享二年（一四八八）四月二十八日、後土御門天皇の御母准三宮嘉楽門院（藤原信子）が崩ぜられた時、准三宮は即夜般舟三昧院に殯せられ、五月三日当院で火葬され、初七日、五七日、七七日、百ヶ日忌がここで修された。

また『般舟三昧院記』に「画所預光信に仰られて尊形をうつさしめ（略）この院にのこされけり」とあるが、それは延徳元年（一四八九）十二月二十三日のことであった。『御湯殿上日記』には「御しゆ（奉）そうのくやうに、ふしみの御寺にてまんなら（曼陀羅）くあり」と書かれ、『実隆公記』には「今日於城南般舟院有曼陀羅供、善空上人為導師、僧侶八口云々、是御寿像供養云々、源中納言、民部卿等著座、依黒衣之衆法事頗嚴儀敷、如何」と述べられている。後土御門天皇が菩薩戒を受け、深く帰依されていた二尊院の善空上人が寿像供養の曼陀羅供の導師を勤めていたことがわかる。また般舟三昧院の住持は、はじめ統恵であったが、明応三年（一四九四）の春ごろ病患を得て辞意を固め、後任住持は勅定によって臨盛となった。

後土御門天皇の中陰仏事が行なわれるまでの、般舟三昧院における追善仏事の主なものを挙げておこう。明応元年（一四九二）七月二十日、後土御門天皇の后妃、勝仁親王（後柏原天皇）の生母准三宮庭田朝子が没するや、同月二十七日、般舟三昧院に葬った。八月十日、同院で三七日忌が修された。また同月二十九日、二宮の青蓮院入道尊伝親王が追福の法会を、さらに十一月一日、勝仁親王と同じく経供養を修している。もちろん一周忌、三回忌の法要も同院で行なわれた。また毎歳十二月二十七日の後花園天皇忌辰、四月二十八日の嘉楽門院忌辰には、この般舟三昧院で経供養が行なわれるのが常であった。

このように般舟三昧院は後土御門天皇発願の御寺であり、当時であつては後土御門天皇家の菩提寺的性格をもつていた。後土御門天皇の中陰やその後の仏事がこの般舟三昧院で行なわれ、また知恩院等が御弔いの経供養に同院を訪

れるのは当然のことであつた。

三

では、知恩院が般舟三昧院に参上して、後土御門天皇の尊靈を弔ねばならぬ理由はどこにあつたのであろうか。後土御門天皇と知恩院ないし珠琳との間にはいかなる関係があつたのであろうか。

後土御門天皇は崩御の前年から御不例であつたようで、珠琳に対し玉体快癒精禱の仰付があつた。『総本山知恩院旧記採要録』によれば、その原本は伝わっていないが、次のような古文書が載せられている。

院御所御不例に付、無量寿仏名数万遍被_レ称_二御丹誠之由に而、卷数被_レ献_レ之、内々令_二執奏_一候処、御気色御快然、尚寺門之輩宜_レ抽_二精禱_一之旨被_二仰出_一候、畏可_レ被_レ存候也、

明応八年十月十八日

権大納言判隆永

知恩院周眷上人御房

侍者中

知恩院では御不例快癒のため、念仏数万遍が修され、その旨が執奏されるや、天皇の御気色が麗わしく、なおも知恩院において精禱を抽んでるよう仰出されたのである。天皇は「位にありながら、後世を御心にかへ」られた浄土信仰者であつた。嵯峨二尊院の善空上人について受戒されたが、知恩院に対しても早くから叡信を寄せられていた。

珠琳が再三再四、年頭拝賀や歳末参内に御所へ参つたことは、『御湯殿上日記』によって明らかである。文明三年（一二七二）四月、後花園天皇百ヶ日聖忌に珠琳は浄土三部經（漸享）を進上している。知恩院は後花園天皇の御服を賜わり、これを用いて法然上人の御影を表装し直した。文明十二年（一二八〇）三月、後土御門天皇がこの法然上人画像を叡覧になられることがあつた。また同天皇は文明十七年（一二八五）十二月にも、法然上人の画像を知恩院に徴

して観覧になっている。

長享二年（一四八八）五月、嘉楽門院の初七日忌法要が般舟三昧院で修されたときには、知恩院、知恩寺は御弔いを申しているし、また明応元年（一四九二）七月、准三宮庭田朝子が没したときには、知恩院へ御影が下賜されている。明応二年七月十三日、一周忌に当って、知恩院へ五百疋の下賜があり、知恩院では翌日御礼に参内、御対面があり、珠琳は天皇に十念を授け奉った。さらに明応三年（一四九四）七月、准三宮庭田氏三回忌が般舟三昧院で十三日から営まれたときには、知恩院へも御仏事が申つけられ、珠琳は「御きやうもちてふしみへまいらせられて、御ふぎん申さ」れ、ついで「御所へも御れるしこう、御たいめん」があった。因みに後土御門天皇の御弔いの節も珠琳は知恩院、阿弥陀寺で書写した經典を持参、諷経し、翌日には御所へ参り、御経御弔いの様子を奏上したのであった。知恩院としては既に先例があったわけである。

年頭等の参内のほか、正月恒例の御念仏、上人号・香衣被着の勅許奏上などでも、知恩院は朝廷と関係を持ち、また「ほしもの甘ぶくろ、みのかみ百そく」を年々献上する例になっていた。

このように、後土御門天皇の珠琳に対する尊信が厚く、その崩御に当って知恩院が菩提を念ずるのは至当であった。「総本山知恩院旧記採要録」によれば、崩御の九月二十八日に次のような沙汰が出ている。

今朝院御所崩御、絶言語ニ之至候、早速奉_レ為御菩提ニ浄土三部妙典被_レ及_ニ頓写ニ之旨、以_ニ寺僧ニ被_レ令_ニ言上_ニ、奇特之儀、則執事中御沙汰有_レ之候、尚宜_レ奉_レ修御冥福ニ者也、

明応九年九月廿八日

権大納言判隆永

知恩院周眷上人御房

即ち、珠琳は天皇の崩御を聞くと、即日、浄土三部經典を頓写し、御菩提に資すべき旨を言上し、御冥福を修し奉るべき沙汰を受けたのである。ついで、参内の命を受け、中陰中に浄土三部經百部を修すべき沙汰があった。殯中の

十月十日のことである。

就_ニ崩御納経之儀_一被_レ伺_レ之、執事中へ及_ニ芳達_一候処、如_ニ先例_一来_ニ日朝五ツ時_一、可_レ令_ニ参内_一、平日御念仏特御信仰之上者、浄土三部経百部御中陰中可_レ被_レ修_レ之候也、

明応九年十月十日

前権中納言判重治

知恩院周營上人御房

御崩御とともに伺い出た經典頓写の件につき、先帝は平常から念仏を特に信仰されていたから、御中陰中に浄土三部経百部を納経するように、というのが今回の沙汰であった。この百部については知恩院はじめ、関係の有力寺院で頓写されたことと思われる。推考するならば、阿弥陀寺が進上した經典というのも、このとき沙汰された浄土三部経百部のうちのものです。後述するような阿弥陀寺の地位を考えれば、珠琳はおそらく、この百部を知恩院と阿弥陀寺で整えたのではないかと思われる。

文中に「平日御念仏特御信仰」とあるが、後土御門天皇は明応四年（一四九五）四月五日、知恩院から持参された「ほうねんの御しひつみやうかう」^{（法念）（旨筆名号）}を御覧になつてゐるように、またこれよりさき同年二月十三日に、校合のすんだ聖教を珠琳が持参して参内するや対面されているように、知恩院珠琳を通して浄土宗ないし法然上人への御帰信の深かったことが窺われる。後花園天皇の御服で表装し直した知恩院の法然上人画像を觀覧になった文明十二年（一四八〇）には、青蓮院尊応が二尊院の足曳の御影をも御覧に入れている。

以上のような後土御門天皇と珠琳との關係を念頭に置くならば、天皇の崩御に當つて、いちはやく浄土三部経頓写を申出で、御葬礼の翌々日には、中陰仏事の始められた般舟三昧院へ納経諷経に罷り出た事情が自づと明らかになるう。

次に淨嚴坊宗真と珠琳との關係、また宗真と後土御門天皇との関わりはどうかであつたらうか。便宜上後者の方からみていきたい。

明応八年（一四九九）春、宗真が後土御門天皇から上人号の勅許を得たことは既に述べたが、これに先んじて「黒衣参内特勅の綸旨を賜」^⑥わつたと伝えられている。『湖東三僧伝』によれば、長享元年（一四八七）足利義政・義尚が鉤に陣どつたとき、宗真は甥の結城七郎を陣に尋ねたのが縁で、將軍父子に円頓戒を授け、その崇重を受け、義尚から宗真の道儀が後土御門天皇へ奏聞され、黒衣参内の勅許を得たといひ、かくて天皇は「しきりにめされて浄土の法をきこしめし、大方ならぬ御信受にてぞありける」といふ。これより天文の頃まで阿弥陀寺の代々の住持は黒衣参内し、また後土御門天皇の毎歳の聖忌には法事を営んで、天恩にむくい奉つたといふ。^⑦『湖東三僧伝』は、さらに後土御門天皇が阿弥陀寺に対し「長享二年当山へ閻浮檀金の弥陀仏念仏弘通の綸旨、淨嚴宗の号、宸翰の阿弥陀寺の額及び香合を賜」^⑧わつたと伝えている。

これらの綸旨や勅額などについては、「天正九年十月七日の曉更失火して諸堂ことごとく炎上しけり、この時宸額等も紛失せり」といわれているが、事実であつたかどうか証拠づけるものがない。淨嚴宗という名称も『湖東三僧伝』に出るだけである。同書には、宗真の言として「今家を淨嚴宗といへば別流をたつるに似たれどもさにはあらず、これは勅称なり、法は全く吉水の流を汲み鎮西の義を伝ふ」と書いてあるが、淨嚴宗が勅称である確証はない。恐らく阿弥陀寺の門流を誇るため、後世に言い出した称であらう。後引の阿弥陀寺清規の最後の部分が『湖東三僧伝』では、「前件之規条者任開山及先師之尊意、以衆議所定立也、自今已後於淨嚴宗、不可有違犯、雖有功老納、不能無罰矣也 明応元年壬子九月 沙門宗真謹識」と改変されている。『湖東三僧伝』は開山隆堯法印の滅後三

百四十六年の寛政六年に信岡が撰述したものである。當時は織田信長の差配で阿弥陀寺から分立した安土の淨嚴院が根本の金勝阿弥陀寺にかわって榮えているので、そのことを背景に三代の宗真にこと寄せて淨嚴宗の名称を用い出したのではなからうか。しかし他面では、阿弥陀寺が回祿後慶長二年（一五九七）にも後陽成天皇から宸翰の寺額を賜わっていることや、さらにこのあと述べるような當時の阿弥陀寺の勢力や前記の如き宗真への上人号宣下の事実を考えれば、『湖東三僧伝』の記述は全面的に否定すべきことでもなさそうである。

そもそも近江における浄土宗は、隆堯法印が金勝山中の淨嚴坊や東坂の草庵にあって宗風を宣揚されてから發展に向かい、孫弟宗真のとき大いに興隆した。宗真は佐々木高頼の帰依を受け、その外護により、隆堯開創の東坂の草堂を拡大して阿弥陀寺となし、文明十八年（一四八六）四月新仏殿において不断念仏、六時常行を始め、同年九月には開山忌を修するなどして、「開山の遺法を中興^⑤」した。これより阿弥陀寺の属院が多くなり、同寺は「一方の巨刹」となったのである。かくて宗真は末寺を統制し、本寺たる阿弥陀寺の地位を確定するために、明応元年（一四九二）九月、次のような阿弥陀寺清規を制定した。これは一寺の清規たるにとどまらず、當時の近江教団の法度たる性格を有していた。

浄土宗末寺法度書

定、宗鉢諸末寺法度之事

一、寺内殺生禁断之事、

一、酒不入之事、

一、公事辺弓矢の談合あるへからざる事、

一、俗方内陣へ入へからず、但志にて焼香のためならば衆僧へ案内ありて可被入事、

一、たのもし合力の宿あるへからざる事、

一、利錢口入あるへからさる事、

一、日暮候て指当用なきに衆僧在家へ出入あるへからさる事、

一、於地下中他宿あるへからす、但念仏結縁のためへくるしからさる事、

一、六ツ後女人くりに入へからさる事、

一、地下番の風呂雑湯に成て、うちに見ニ入へからさる事、

一、断洒たるへき事、

一、ひる禰すへからさる事、

一、夜るも衣をはなたす、まろねたるへき事、

一、此室に入らん人ハ一向念仏三昧たるへし、智者学生なり共、諸經読誦等の雜行あるへからさる事、

一、当宗たらん人ハたとい才学ありとも愚痴にかへりて念仏候はん事本意たるへし、況や無智の身にて他宗と法門是非のあらそひかく停止あるへき事、

一、衆僧他行の時ハ住持へいとまを可被申、留守ならハ宿老中へ案内あるへき事、

一、寺家にふしんあらん時、さしあたる用なきに他行あるへからす、時をハ宿老衆ひかへられ候て、其外は皆々出らるへき事、

一、俗姓たてすへからさる事、

一、衆僧靜論の事あらは、住持宿老としてかく教訓してしつめるへし、若猶無承引者、本寺へ注進あり、寺家を退去せらるへき事、

一、たち、かたな、弓、やりなどの武具持へからす、但寺内盗人の用心のためへくるしからさる事、

一、小袖きるへからさる事、

一、ご、しやうぎ、よろつ勝負、并おんきよく、くせまいなどの遊らんあるへからさる事、

一、当宗は何事も多いようをこのます、衣食住所ニおきてもけつかうを用へからず、世間仁義の思をやめ、信施をおそれ、人のわつらいをいたむへき事、

一、病者あらハ役者心に入らるへし、但かん病の事ハ衆僧番おりにても、又一人としてもせられ候て能々念仏をすゝめらるへし、

一、宗牀往生あらハ聞かけに過去帳に入、経念仏回向あるへき事、

一、縦虚名なり共、大犯の三ヶ条、殊乱行盗人の難をきたらん人は申明旨なくハ同座不可叶、此条見隠聞かくすへからず、但実犯なき事を申出ハ宗牀無与たる上は申つけたる人同罪たるへき事。

一、物詣之事、伊勢熊野善光寺などの事ハ、一ハ恩徳報謝のため、一ハ世間の有為無常をも知りて信行増進のためならは参らるへし、其も常住の用又ハ法事等につきて住持のいとま出らんニをして参候はん人は、下向ありて其寺に堪忍不可叶事、

一、本寺へ案内なく同道の人もなくて久物詣ありて帰来人ハ、信行の実否無証人者不可有同座之事、

一、本寺へ申子細もなく、在所に証人なからん人、妻子あらん古里に居住あるへからさる事、

一、興隆と号し、くかい法界堂塔の勸進聖すへからず、但宗牀之中由緒の子細あらハ衆議談合して可有興隆事、

一、本寺より詞を加、住したる在所退出あらん時、可有注進事、

一、何様の末寺居所にあり共、其寺の徳分自用につかふ可からず、若よけいあらハ興隆にせらるへき事、

一、座配の事、大方は戒臘次たるへし、但年たけて発心の人、或は横入の人あらハ其ぬしによりて時の住持の儀又ハ衆議をもつて定らるへし、生徳隱遁の宗たる上ハ上下のあらそいあるへからさる事、

一、当宗尼衆之事、元者山居之室ニ候間なく候、され共、念仏他導につゐて深重信仰の人堅のそまれ候間、今ハ

弟子一分の人少々候、然間別時などの人数ニ加ハル僧達共行あるへからず、又物詣同道不可然、但皆々存知の親類年老などの事は非制限、

一、当宗を憑出家候て所々にあらん人、本寺代々の住持并末寺看坊役者さしあたるちかひなきに、みたりかはしく是非あるへからず、但不可然子細候へ、興隆の心中にてひそかに可被申上、尚以宗躰の人を他宗在家の前にて誹謗あらん人ハ一段無興隆たる上へ、しつかに聞合候て宗躰を破らせらるへき事、

一、先師恩徳報謝の別時念仏ニハ、いか様の障入候共可被出候、然者逗留の間の時料必ずもたるへし、近年末寺同衆僧おゝく成候、我一人と被存候とも方々より被集候間如此候、又本寺の御本尊へ参詣候はん人にも、同前之心得たるへき者也、

一、当宗たらん人、公事辺弓矢の中人、又就政道被官等せっかんあらんを難去申により、聊爾に取続候て訛事あるへからず、万世間の事を通て念仏申さんため出家候人、末世濁乱の時分、右様の事に障を入候へハ不可際限候、堅斟酌あるへき者也、

一、宗躰をたのみ出家候人、居所なきにつめて訛事候へ共、可有扶持在所なく候処、等閑の様にかたく被申候事あるへからず、他宗などへ其会下たる人は本寺の興隆忠節功をいたし、諸役を被勤事ニ候、左様の儀にて候はす共、無了簡煩を被申候事、主のため二世の冥加も不可然、各々其心得を可被成者也、

一、当宗念仏安心者、開山御集之大要拔書之趣不可有相違、殊にハ法然上人御法語、罪ハ十惡五逆も生ると信して少罪をも犯されしとおもふへし、惡人猶生す況や善人哉、行は一念十念も生ると信して多念に励むへし、一念猶生す況多念哉云々、此旨を能々心得候て常に念死念仏の用心に住して、心に助給へと思ひて、口南無阿弥陀仏と唱ふへし、此外ニ別の子細を申されん人をハ縦智者学生なりとも依用あるへからず、又於行事者阿弥陀經発願の文、念仏の外他事あるへからず、人人の意案にまかせて色々の勤不可加修者也、

右此条々者任開山先師之御素意定置者也、然間為当宗人者、努々不可有違背、縦古老之仁又宗牀雖忠節之人、於背法度者、可為無興隆、左様之人牀全不可有許容者也、仍此旨以衆議堅所定如件、

明応元年九月

この法度の意義、内容などについては、簡単ではあるが別に述べたことがあるのでここでは触れないが、この法度から、宗真の時代に阿弥陀寺が中核となつて本末圏が形成され、制定者の宗真が膨張した阿弥陀寺末寺、宗徒の盟主的地位にあつたことが明察できる点を指摘しておきたい。近江では十五世紀後半に金勝阿弥陀寺を中心に宗勢が伸張し、この阿弥陀寺末寺圏が近江教団そのものであつたといつても決して過言ではない。まさに阿弥陀寺は中世末近江教団の本利であり、宗真はその領導者であつた。『湖東三僧伝』はその興隆の様子を「かく盛になりもてゆくほどに門弟千余、子院六宇、属院数百属院の中師の勅建も多く、又師に帰し宗を改めて属院となれる寺も少かへずに及びしとぞ」と記している。宗真を開山と伝承する寺院も蒲生郡、野洲郡、甲賀郡に多く、また近江の現存浄土宗寺院の開創期が明応を中心とした時期から増え出していることなどを考え併すと、『湖東三僧伝』の記事は史的動向を確かに反映しているとみられるのである。

このように、金勝阿弥陀寺を拠点として宗真の時代に、中世近江教団が江南地方に形成されたのである。従つてその指導者の宗真が後土御門天皇から上人号を、また阿弥陀寺が宸翰寺額などを賜わるとは怪むことではない。阿弥陀寺では、後土御門天皇の聖忌を毎年つとめて天恩に酬いたといふのであるから、後土御門天皇の崩御に當つて、この珠琳の書状にもあるように、天皇の位牌のことで珠琳に照会したことや、阿弥陀寺からの納経があつたことも、納得できるのである。また、すでに述べたように知恩院は天皇の菩提を弔うため浄土三部経百部の経供養を朝廷から仰せ付かつていたのであるが、珠琳がもしこのことについて他に助援を求めるとするならば、宗真こそが最もふさわしかったと思われる。なぜならば、宗真の上人号勅許を執奏したのが周琳であつたということ以上に、両者の間にはもっと密接な関係があつたのである。そこで以下転じて宗真と珠琳、さらにいうなら宗真と知恩院との関係について述

べてみたい。

知恩院は応仁の乱で諸堂が炎上したが、周琳はいち早く復興にのり出し文明四年（一四七二）四月、まず開山堂再建の勸募に着手した。これよりさき珠琳は青蓮院領の近江伊香立荘に乱を避け、法然上人像をこの地に移していた。『総本山知恩院旧記要録』には、法然上人像の遷座について朽木氏の外護があったとして、旧記を引用して次のように書かれている。

応仁之兵乱にて堂坊悉破壊、無拠江州伊香立へ立退申候、

京都騒乱に而法要も難整承及候、当国へ被_レ為_二下向_一度由最候、家中一族為_二婦依_一上者別条候間敷、当所無異に候、元祖之像を護持可_レ為_二下向_一候、什宝者及_レ力間敷候、伊香立におゐて住所可_二定置_一候、謹言

朽木民部大輔植綱判

知恩院長老

雜掌中

旧記如_レ斯、尤近江国伊香立におゐて堂宇を建立し、新知恩院と唱、爰に住する事八箇年、後土御門院勅によつて、再び堂舎を旧地に建立し、真影帰洛に相成候事に御座候、

この朽木民部大輔植綱の書状自体については疑問視されているが、知恩院安置の法然上人像は応仁の乱によつて、近江伊香立に移され、開山堂の再建とともに再び還座されたことは相違のないところである。動座に當つて像が傷んだらしく、復興された開山堂へは修復の上安置された。この法然上人像の修復の勸進に當つたのが実に宗真その人であつた。現に知恩院大殿安置の法然上人像の居敷に

奉修復法然上人真影、勸進之聖淨嚴坊宗真、施主蒲生藤兵衛尉也、文明十六甲辰年三月日 于時住持当院廿一代棟蓮社周誉花押 右此真影者、為根本御自作、同四十八日御開眼供養之靈像間、雖多其憚、就天下藥乱、而依有御

損壞、為末代興隆、所奉修覆也矣、仍意趣如件、敬白、

との銘があるという。^④蒲生藤兵衛尉とは蒲生秀紀のことで、近江国蒲生郡日野信樂院の開基蒲生貞秀入道知閑の孫である。またこの法然上人像の跏趺坐の裏面に珠琳の朱字の記があり、磨滅していたが、元禄十年に写し取ったところでは

文明十六甲辰年十月七日 当院廿一代住持周誉花押奉修覆知恩院開山法然源空上人御自作之真影者、為寺家之靈
 □相伝異于他尊像也、雖然去応仁以来天下之藥乱而依有御破損、乍以所奉修覆之也、仍修覆之趣如件、敬白、
 とあった。^⑤

文明四年には開始された開山堂の再建は、同十六年（一四八四）以前に成就し、開山像も修覆され、さらに方丈、客殿、山門等も竣工していた。同年十二月には烏丸資任の三年忌が復興なった知恩院で営まれ、足利義政も参詣し、住持の珠琳と対面しているのである。^⑥青蓮院尊応はこのような珠琳の復興事業を嘉して、珠琳を「中興之開山」と讃え、山林敷地を復し、法樂寺無量寿院総別寮舎之敷地等も珠琳の進退に委ねた。即ち長享二年（一四八八）八月に次のような安堵状が出ている。

今度当寺再興事、為当代一円之経営、励土木之大成之条、頗可謂当院中興之開山、殆可覃星霜於慈氏下生之曉者哉、然上者寺家敷地山林同寺領並法樂寺無量寿院惣別寮舎之敷地等、且訪先規由緒、且任当知行旨、為寺家進退、不可有相違者也、仍為後代之龜鏡故、所染筆之状如件、

長享二年八月九日

尊 応（花押）

知恩院住持周誉上人

以上のように、応仁の乱後、知恩院は珠琳の二十年に近い歳月をかけての復興への尽瘁によって復興するのであるが、この復興には宗真の助成があったと思われる。開山像の修覆勸進に限られることなく、知恩院の復興にひろく阿

弥陀寺を中心とした近江教団の援助があったであろうことは、宗真と珠琳との関係、さらに宗真の近江における勢力からみて、当然考えられるのである。宗真の先代たる阿弥陀寺二世の堯誉隆阿が知恩院門下の招請によって知恩院の住持となったと伝えられているが、その事蹟は全く不明である。恐らく後代になって堯誉隆阿を知恩院住職の一代に加えたものであろうが、このような寺伝は知恩院と近江教団の關係が十五世紀中頃以降において親密であったであろうことと、またそのことを主張したいむきが存在したことを示唆している。

知恩院の中興開山たる周誉珠琳と、阿弥陀寺の実質的開山たる浄嚴坊宗真とが同時代に活躍し、両者の提携があつて、一方では知恩院の復興、他方では近江教団の伸張を果たしたことが以上の考察によつて明らかになった。冒頭に掲げた珠琳の宗真宛書状は、右のような背景を有したもので、珠琳と宗真、さらには知恩院と金勝阿弥陀寺との關係を示す貴重な史料である。ことに中世の知恩院文書が少ないなかで、この書状は知恩院史解明上の一級史料といわねばならない。

また、阿弥陀寺は、天正年間織田信長が金勝にて放鷹し、八代住職応誉明感に遇い、その高德を慕つて安土城下に寺僧を移らしめ、佐々木氏菩提寺である慈恩寺の旧地を与え、改めて慈恩寺浄嚴院と称せしめた寺歴をもち、阿弥陀寺所蔵の開山隆堯法印書写の聖教類、阿弥陀寺清規など旧記文書等が殆んど浄嚴院へ移されたので、阿弥陀寺に今に伝わるこの珠琳書状は、阿弥陀寺にとつて貴重この上ない寺宝といえよう。

筆者は二年ほど前、阿弥陀寺現住の石橋真誠師よりこの書状を見せて頂き、周誉珠琳の書状ということで、知恩院史料編纂所の研究例会で紹介をしたことがあつたが、その時には簡単な所見を述べたに過ぎなかつた。今、故恩師竹田聰州先生と故森鹿三先生の追悼号に寄稿するに当つて、改めてこの書状を取上げ、その内容、背景、史料的价值などにつき考察したところを述べることにした次第である。

註

① 『湖東三僧伝』（『浄土宗全書』十七所収）。

② 現行の知恩院歴代では第二十二代とするが、珠琳自身が書いたものには二十一代とある。新知恩院所蔵の「新奉造立上宮太子形象安置東山知恩院事」（明応二年）には「東山知恩院廿一代住持棟蓮社周誉」、「珠琳置文（端裏書、東山大谷知恩院記録）」（文亀三年）には「当院廿一代棟蓮社周誉」と書かれている。また「選択集」（長享三年書写）の奥書にも「東山大谷知恩院廿一代住持棟蓮社周誉」とあって、当時は珠琳が知恩院の二十一代であったことは動かし難い。

③ 『後法興院記』文亀四年正月二十七日条。

④ 『統史愚抄』四十二、明応九年三月二十三日条。

⑤ 『御湯殿上日記』『後法興院記』明応九年九月二十六日条。

⑥ 『御湯殿上日記』明応九年九月二十七日条。

⑦ 『後法興院記』明応九年九月二十九日、十月七日条。

⑧ 『統史愚抄』四十二、明応九年十月二十一日条。

⑨ 『後法興院記』明応九年十一月十一日条。

⑩ 『統史愚抄』四十三、明応九年十一月十一日条。

⑪ 同右書、明応九年十一月十二日条。

⑫ 同右書、明応九年十一月二十三日条。

⑬ 同右書、明応九年十一月二十八日、十二月六日、同十一日、同十七日、同二十三日各条。

⑭ 『群書類従』第二十四輯釈家部所収。

⑮ 『親長卿記』『御湯殿上日記』文明十一年八月四日条。

⑯ 『御湯殿上日記』『実隆公記』文明十八年十月二十五日条。

⑰ 『後湯殿上日記』『統史愚抄』四十一、文明十八年十二月二十八日条。

⑱ 『御湯殿上日記』『後法興院記』『実隆公記』『親長卿記』『山科家礼記』長享二年四月二十八日条。

⑲ 同右諸書、長享二年五月三日条。

⑳ 『御湯殿上日記』『実隆公記』長享二年五月八日、六月四日、六月十八日条、『親長卿記』西年八月十日条。

㉑ 『実隆公記』明応三年二月二日条に「今日臨盛大徳入来茶一壺被持来云々、明日可移住般舟院云々、統恵大徳病患之間為湯治下向摂州、帰洛未知其期、仍彼御寺住院事辞退云々、件替為勅定被定下者也」とある。

㉒ 『親長卿記』『御湯殿上日記』明応元年七月二十日、同二十七日条。

㉓ 『和長卿記』明応元年八月二十九日条、『御湯殿上日記』

『実隆公記』同年十一月一日条。

㉔ 『親長卿記』文明三年四月八日条。

㉕ 『御湯殿上日記』文明十二年三月五日条。

㉖ 同右書、文明十七年十二月十三日条。

㉗ 同右書、長享二年五月八日条。

㉘ 同右書、明応元年七月二十三日条。

②⑨ 同右書、明応二年七月十三、十四日条。

③① 同右書、明応三年七月二十日条。

③② 同右書、明応三年七月五日条。

③③ 同右書、明応四年四月五日条。

③④ 同右書、明応四年二月十三日条。

③⑤ ③⑥ ③⑦ 『湖東三僧伝』（『浄土宗全書』十七、六二二頁）。

③⑧ 同右書、（同右六二〇頁）。

③⑨ 香月乗光・伊藤唯真共著『日本の宗教二（浄土宗）』（宝文館刊）六八頁以下。

④① 拙稿「近江における浄土宗教団の展開」（『仏教論叢』八号）。

④② 『大乘院寺社雜事記』文明四年四月廿六日条に「知恩院

開山堂奉伽帳加判之」とある。

④③ 『華頂要略』によれば、応仁元年十二月二十六日、足利義政は近江伊香立荘を青蓮院に還付し、不動院顯豪をして安堵せしめている。

④④ 松庵（今岡達音）「伊香立新知恩院に就て」（『宗教界』二一九）。

④⑤ 「知恩院御影堂本尊大師御居敷記」（『知恩院史』四三一頁）。

④⑥ 知恩院藏「円光大師鐘御影御居敷記」（『知恩院史』一八九頁）。

④⑦ 『蔭涼軒日録』文明十六年十二月十三、十四、十六日条。

④⑧ 知恩院第十九世とする（『知恩院史』三三八頁）。

